春色連理乃梅 七編

和 門
文 部
文人
3l 號
五 冊
2

國語
4L
124
2

春色連理梅第二編序

夫人情と公道と両全ならんこと難し。公道に依ば人情闕。人情に順ば公道虧ると墨翟も。這岐道に泣涕し。其人情公道の両全ならんハ小冊の趣向。夫を慕ひ妻を想ふも。

L112574

世間一統の人情なり。夫婦ハ道の大倫ぞ。相互に戀人和合し。子孫を繁すとハ公道なり。是人情と公道の両全にして又何ぞやと。自己得意の作文をヨツト承知の板元が義冊に製本兒女童男達に御覧

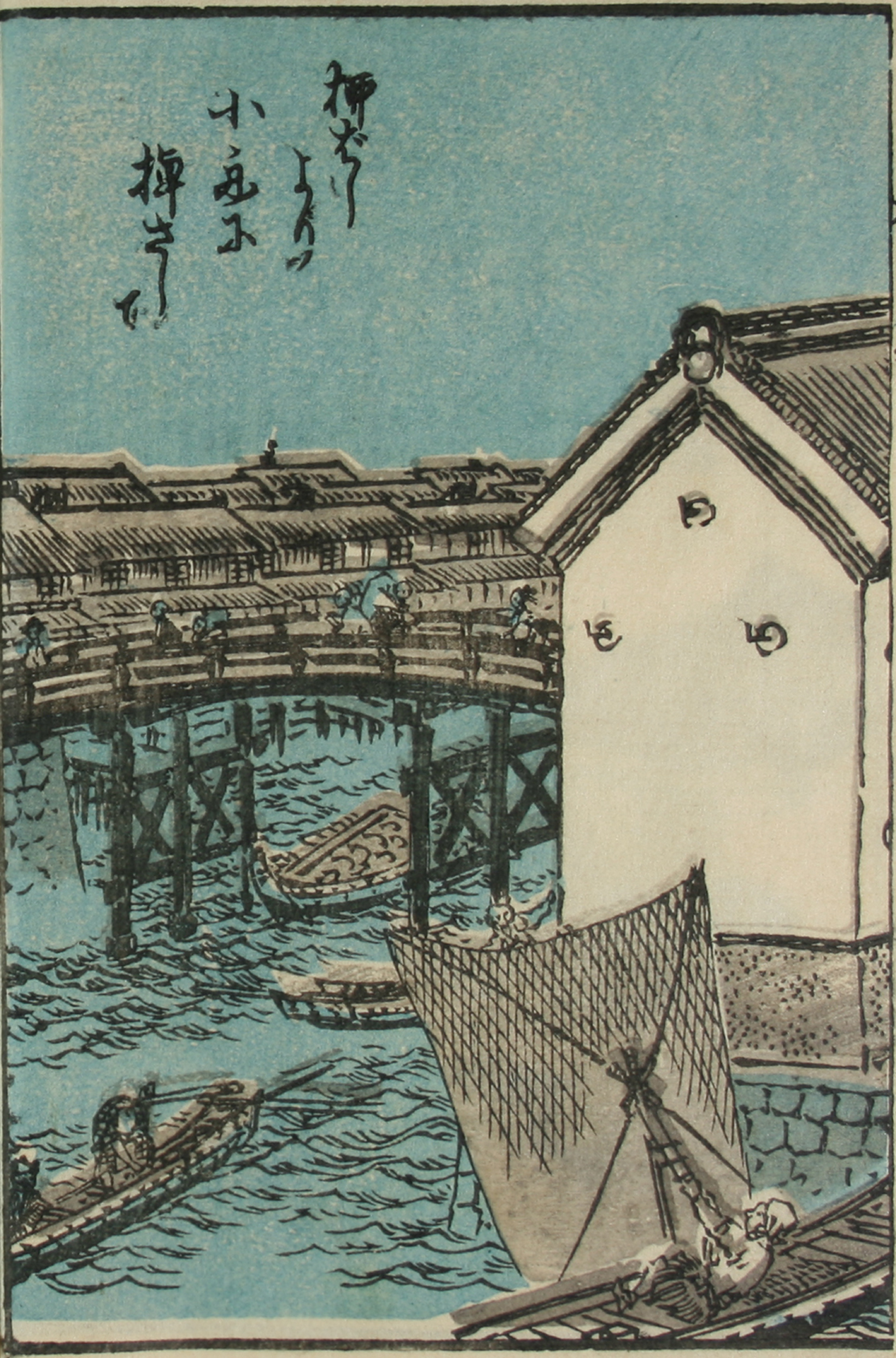
而今々利を得と謀る人情速に壽梓紙成。扨爺が。梅星頭窗を指して爾云。

二世梅暮里主人
鈴亭梅星爺戯誌

（印）

風に従ふまゝ柳樹の糸に命を継棹も母を
若ひ妹を育つる浮世に欲し泥分に溺れ
心もつとめの身貢をも恥と歎くも
思ひ当りなきお客の咎にて
其身の罪にもあらざる
べし嗟泥中の
蓮に
比べく恥し
かくね
藝者の
お滝

譲りを受し家業を守り
親に孝あり他に恵ある身を慶
らさんと上を敬ひ下を憐む情ある
若堅物なりしが其行状正しく
優しければ何ぞ後指差るの
差別なく女子にもてはやされ
評判までもさらに溺れず
扁屋を云ぬ通人仲の素人と
是をても何処の壮者ぞ女中縁
連理の枝の捨遊別号
比翼鴛鴦と不番しく語流せり



故人都松玄濤が門弟の中ふもとり別て
花廼しらべ斎じめさく先好きわらきゑ
手諸君当時一果舞字治世葉文が
新文句の節を
附る
不
おき
浅合人と
あまたに恩ある老色
友合の娘お菊　春風亭谷二述

春色連理梅巻之四

第七齣

江戸　梅暮里谷峨作

百敷や。古き御製にあらく抜ごのたるね
身も恐べきものの軒端に縄くらむ合。屋が里の悦の
艶き妬げ嫉悩外の禍をん起ひきあふまでと
まさく。掻つかなる両個連通りもがりの一個の
女子。嬰うけしまて悍しあがく。泚も切さくぞ立

止宿し二人、互に遠し見えて 房「ヲヤお豊か 豊「ハイ
若旦那さまも私もモウ〱どんなに気をもみましたらう 房「何故見へ。何処へ往ので 豊「叔母さん
お迎に参つたのでおたづねましたヨ大かたお菊さんと
母さんのお宅でござらうとぞんじまして 房「己も急用が出来
たので 豊「急用の所を其処でもござりません
先刻から本家の旦那さまがお入つて悪君の
お聲がするとおそろしく母上に理屈をお宣つて

何でも今宵今宵ねましても亭主ならび亭主の身も
しく随喜して勤當あり抑此ありして今歓
中に情を明すあけまじなりぬく立役きッてらぬ在
まはもんざうる法體隠居さまへもうくおぢく拝し
てらぬ花すくんト
実にさまざまのお屋二節もめぐでのうくよいつめの
ましき今まきものあんどおきくまでもあいのとせ
お豊のまくもきのぐくらしくてあがりくまいるつまんざ悩し
みせん様のみけんなうしくまうく祐ども今までひ男が宿のうくの一大る
ぶとく拝ひ申る縁のあんど　呈「悲りをまめ夕大慶ぞ〜おまく
をあまみトうるべし
を渡方　杯楽の主人まいよ　おおきが処あり　のふらく云行こをむうひ木疵さ

のうとよ「イヤ立花様でもおぼへはござりませんが、おきく
さんの宅へ忍び入てゐる路が露顕して居ますれば通路
を嗅付ちや堪らぬ。爰の手代貞がまさアノ意地
悪だんなのことであり、でも捜しに参りておきくさんのうちで
若君を突留ておきくさんを捜させそれハモウ東条若君の
おさめなる見当でござりますまいとぞんじまする。一寸
様でも道場居さ母に延て紙箱中上て妻岡のお達
参りませんうちに私がさきへむかひに参りまし

のぞのぞいましよぞろし御君でアお吾でも一寸お顔の
抜がしまして首が真しらおぞさんまたかさとぞんト
ません仮令傳通院におほれ抜きても又押込におまらり
抜されて四方外へ、お出抜もてくだお、おゝ出来なさる
なれバおかまり抜しても婚談をさしすが又どうろ
男盛りでお若い人のお裸ひかうらていうしますせんかくト
ゆとん筋なおまへがことがよ「アノ房さんお嬢の出様子じや
おきくぬこてろうましくて
ア母上がさうそ迦ん紀をら臓てらぬいぞらゝ

嘆うしきぐにあの客と流連立まお腹あまりな
私もいやうちの遠まで送つて参りし左様子細
なよ○子房さんト女さしく云ふにむきそめのう同を
つぐくりれるよ聟殿番藤あらる。尊もこれまて容貌よ
猫のおんどの那て耕を合るいしらしさ。女あたら
も惚くと云ひ要開けんとれてこ徒ちつお要くも風と
んづき「アノ若旦那の新き母エ思召がおきくさんで
さらり雨在様まへのく 房「ムヽト あがる とよ「ヲヤ左様で

でござりやすにそう私とも旦那さまの細かなちう〳〵
お口不器用ましは出しやしまんものでござりやすれ
途中とハ申シながら泊挨拶もいたしませんで
て失礼致ト　主人うなぎにあいさつされて「ホヽヽてア
驚きもやうきまんくさる体
とんでごさりまして失礼致申シまけを
左様のでおざりやすれモウしく面目もござりやせん
それ旦那さんのこゝへ客人皆様の御蔭のでござりやすそ
ろくお様も道まよふが何率慌恩しそらやすし

亭「ヲヤまアよんでおざいますのう子。アノモウ御隠
居さまも夫郎おまへさんのお噂ばかり被仰して
ござる故陰居もあらくば辱ひりのござが義理などと
つゝひのりのもてなしくら内緒でおゝおんど挨拶して
まゐりお在ら繁まんヨそれはモウ我等一ッおまへ
お出長挨拶しさ都因ほさまでござる内花まいらく
さんでお国から繁ませうがテヲ何年義年も
御ゝしておあげてなさりましヲホヽヽ房「アノお御

おまへそれじやア爰らで他人も通らぬ寮朋町く
待つ居た其の未来く呉れ十歳して三人でよくお清書
して家へ帰らう「アヽ其ら姉ヨ親もお目出度う
すると幸ござるお嘘中して退らいてもあらう〳〵
モウ夜さらハ寒くもありませんからお前ら姉さ
らござりま「ハイありがたうござりますドト
房「そうまアこちら悪気さ「十二歳からしても宜で
あらいさま其のおれの第一正徳のおむらひがおきくさんの

お宅へ気の毒ながらおはなし申して居ましたら外聞悪くてござりませんが様へ房「ムヽそれも迷惑さ

ノ「十二房さんそれは子母上に存でござりやす、様連ア二階でお噺を致さうではござりませんか

房「アヽ然サニアどうぞして弟と姉のおさんをつけて家へ帰いつて親達が行を撥語ろ立を

あいさつうお豊それぢやアおまへ兎も角も一連に来て呉ますか豊「ハイ左様ならゝ供一連に

参(まい)りませうし按摩(あんま)のおてまが困(こま)りましてへ悪(まる)敷(はだか)
ござりませぬ王房「あゝヨそれハ承知(せうち)でござる郎(らう)あゝらう
郎(らう)といふお僧(さう)さんをたのうでござりますホイそれといふ
なげふもいらないよ。孫(まご)くおきくさん 菊「ヲヽ
御経(きやう)サ 房「孫(まご)しろ降(ふる)く濁(ぢよく)とせうそ然(さ)やう
まじく云(いひ)出(だ)されてはちとこまるぞ 坊「二人(ふたり)よれバ
文殊(もんじゆ)の智恵(ちゑ)ところかしまゝ孫(まご)ら圓(まてきうぜん)も
つきこまうぜう 孫くおお菊(きく)さん 菊「ハイモウ漸(ようよう)うお腹(おなか)

さりとておまへさんひとりを杖(つゑ)ともたのしくも
思(おも)ふて居(ゐ)ましたが何卒(なにとぞ)国許(くにもと)へお頼(たのみ)申ます「
なかくどうぞいさして親(おや)がよりなきとて郷(くに)とおす
こゝろあてなりませんが孝(かう)なぐくる是(これ)なとう和合(わがう)と
策(さく)ならずとて終(つひ)にもる人(ひと)がめし出(で)ましても又(また)其(それ)を
及(およぶ)ともなぐらう親(おや)が請(うけ)になり日向(ひなた)になりいたして
おかへりのお気(き)のやすまるやうにいたしません
かゝりけしておめんどうながら家来(けらい)まはなかれ「ありがたう

寒不顧卒「ア然れども果く悔て末を
寛ナト之人遅ぶ事悔り而く。雲紀籍之ふも
あろうく。跡末の池視壽憶ていえに縁ぞお互
見とがめられむと思ふ末ア。通るつ世の中す訳
まで廣き廣小路も。悪べ様き見りくの湖遊子
謙く房二郎をつくさるむさあと輝女の丈夫ふ
なき思ひ。両國橋の長在あもみぞうくあり
女丈夫。よし川町もうち耕らく。ひさぎく田を

房二郎
勘八

おきく
おとよ

町境。をりふしあふ万木まで柳樹を吹風騒しく又十
嵐の。家根うへ白眼鬼尾の。ひゞりも凄き思ふ嶋
本。野木下つゞき折曲る。横町の出会がしら、夜目
遁さぬ猫の眼。鷹の眼。支配人の動へが。弓張
提灯差出して　動「ヤ若旦那　彦「エヽトびつくり胸
ひばも向ふ相手お家とおとなひ。おもひがけざうつと
あきれ果て呆て雲隠も寄も転倒も衿ふもあへでぞぐり。
さん此議の四人。懇ふれども済べうるび。動へは

理屈をのべて情欲も房事を連ね
なくて果敢事なく引裂きて。濡合なく
言の葉も。なまきの洞の別様に。ある方の意情。
独り寝するお豊がん痛。彼是のことが年頃
委しく記さずごとく。理論不届でありし
うらぶれ恋愁しける童男女児の色を恐るく
其条を尋ね。存じ不望く、肩然の夫婦を
有り知らく。なからず現めかせども実に続く文一股を。

小一丁子燈籠して。作者が手前の燈籠をなして。
摘墨斧が懐櫓あるべし

第八齣

村雨晴の稲むらくもの波の又。胴同の勤本あらし
孫ど。鉄炮の火をふきかけ。掃除してある流し板。
ふうち流下僕「あるべ風呂のあがり檣で
この後幕をあらきんが見つけきえてしまふたるる
なきけるはしとしてしまふと泣しみ付ての御後立ツ

戸(と)をあけてのぞく 下女(げぢよ)「モウ沸(わい)たく 下男「よいと〳〵せ 下女「ござんすおふざけで無(ない)ヨ宜(よろ)ウ然(さう)カーしをあげるう〳〵 下男「ふざけやアしねへ理(り)とつふ不ヨ 下女「それじやアお連(つれ)カースヨそれ〳〵子弟(おと)で今度(こんど)を入(いれ)て来(き)てお呉(くれ)ヨ 下男「ヲイきた〳〵承知(せうち)ごト

不口(ぶぐち)らしき顔(かほ)にて湯(ゆ)あとのことぴつしより立(たち)湯(ゆ)て帰(かへ)りきたる下(しも)

下女「アヽお松(まつ)どんヱお風呂(ふろ)が宜(よろ)しうござりますそ 松「ハイ直(すぐ)にお連(つれ)申しても宜(よろ)しく 下女「ハイ淸淨(ちやん)としておきますよ 松「先様(さきさま)あらうのまゝ旦那(だんな)さま

おめし拵かゑ　房「父上も母上もモウ懃このうヱ　松「イヽヱ爺さんがお風邪を召て引籠在ますによつて今日へ

おめし拵ゞしませんかへ〳〵ノ兄君とお嬢さまをおつれで

おあそびなさいまし　房「ヲヤ左様かそれではお雪おまへマア

お遠入ナ　雪「イヽヱ私もお跡でまいりますによつて

兄君マアおめし拵かゑ　房「左様かそれじやア新造

遠入ことうか　松「お嬢さまとお鶴でおうましよう

おあそびなさいましよう皆が遠入今すこし跡のぬくい

せうかお湯が彼方の木掘く若君のお好でござる在
ますせうト房二郎をおろりとなんて寛なさるふ房
二郎も若さうひ焼物のおるゑさるふ分らん 吾「
ヲヤ私ふ何がお對のごとく 松「十二お湯が蕎麦で
若君の容さとゆーしまんしたつとせ 吾「ヲホヽヽいやおか松
ござねく 松「ヲホヽヽサアいや萬圓形さ安ら白入ましーアノ
お嬢さ安も諸藝ふお百姓さずせ等 吾「私もうく
下笑ねく 松「十二丁笑つとがあのまんまぬ立ち支帰

でお湯を召不渡縁とかしましたのう　房「ハア宜
ましたらどうでもやっぱり湯ざうがかく待てお在　松「
アレ御君が、其様て越ら内結ろお懐さへも
法恵さ通悪だろう指ばしてら内在ましてま子どもも氣国
此さへ程が忠思ヨ彼方へら内入ッちやア然でも
おぎやいましたけれどもト目眼見、て招ひのお松
あまとべお客が恍惚のちまッときさま早発ての
焼餅たるべしー　房「十二、おめたくもあく　松「サア

お寝衣さへ取上ゲ直ニ寝間にあそバされと詠共ニお召ニ浴
ばせヨ○サアお衣更抱ゲセト浴ろさを拭てやろく
廻をバ処女んふもろうしく。廿日以来同閨房寝覚を
共ニしあがろもまんざらち縁ぬ男気を思ひまゐ
せバうくめしく。又まさうなしくも娘ぶりて。気をもち弟寺を
お松ぶえうくひ。男の心を酸うして座ぶるお内記を
無理やりに女房二郎と詠共に湯どのへつき添ふ　松「サア
お湯も宜加減でおざへまんれト　おさりを湯へ入られ宜　松「
せんきしまがる

アノソノ五郎兵衛さまのお布を是でおざいますヨト　言ながら出す

松「お嬢さまのお背をさすりしろお流しやこまする

うらお伽ぐ五郎兵衛さまのお背をお嬢さまお起し

お流しあそばせヨ五郎兵衛さまエお嬢さまもお流

しあそばしておめしひ掛つせト　いひながら背の寝て流てしまひ　松「アノ

まさらしをお部屋へお茶の土瓶をうけて座敷ましく

うら一寸見て気じまんヨ　喜「ヲヤおまへ爰に居

あいのさ　松「ハイお客でおざいますらく　喜「フムト

まつてゐる
居る
「おゝし遅(ちき)まりましたヨ○ヲヤおひやなくなく
嫁(よめ)まして子一騒声(そうぜうせい)をおつかあげてお湯(ゆ)がぬくみをつけてお其(これ)ヨ
ト こまつけなぐらゐをふそに出(で)むくあとふいさしむくいひさぐのいひふ 房(ふさ)「一
たぐるの足(あし)のまゐるさ房二郎も風呂(ふろ)の蛸よりいで、一
サア寒(さむ)くなるうつお、遠入(はいり)ヨ私(わたし)もモウそろく
あがるよう 喜「ヲヤ左様(さやう)ならおせなかをながし
ませう 房「ナニまア宜(よ)うござりますおまへ中(なか)へお這入(はいり)ヨ
風邪(かぜ)をひくと悪(わる)ひよ 喜「ハイ左様(さやう)ならおさきとし
お待遠(まちどほ)ばせヲノお縫(ぬひ)も湿しておざいましたヨ 房「一、

是ぞ子ヲヤ是ヲ何ぞ云んぞいふもあり問何
あらかしらト
いひながらつらつて居る。おゆきハなげて湯の中を
おつしやぞる家あまりバなれさへなそろ〳〵さらりに
房下所のうしろへまわり着ものうら紀はたゞのつうぬすうふゝ手を
のだーしてせなかをあらふ是世界ありのまゝてむまめあり いぢわるき男と
ひとつ風呂ふさしむかひのよんどころあれバもござふもすぐへぬるくとこを
見もつけべきことなれども世俗のうちに浮気といひ且その家の軒下
をとこころもなへおゆくる是ぞむまめのまゝ情なくまぐて女の男にを
しぐらうつゝハこゝろし世にきゆんといふらうて噺でうちおきのごとく鄙もあらず
當下二月の中旬も過て湖のむ。寒さも風呂に
あたゝ霜の。訊溜る。桜色。見えてうらゝか世の中
の人つれてうらゝと古の。歌にも詠てあるゝめのを。節まで

葉わするゝろの袖井までしも波もかゝてよるこぶりより
琅玕を云ばえふ巌の玉のさかなふごふ。一云の根之
をもいま嶺凝し雲かゝりて。気結ふ晴ね猫のうち。
男もあしゝねふあゝ称ども。まして界関ね一向の凝
殺。お業ふ義理を立秋の。紅葉ぶるゝの羅汁の。
いと半温く下縁く。あがれつさえるき寒味さゝらさ。おも
ひく殺をまうちひろげて。うしろくあかべお互ふびゝさり
と付紙とえんご。是いとふり向き見ろいん新。まろのさかなふ

沐して お髻 房にして 赤縄を むすぶ
おゆき

房二郎

ありて漸(やうやく)お客(きやく)ぷ立(いつ)くらしいと聞より氣(き)のぷ附(ふう)りよ
えらくくり此時(このとき)ぷ捨(すて)て置(とう)きねころろなありて 女房「
お客(きやく)やモウ宜(よ)ヨ寒(さむ)くくおお縁(ゑん)ざうふうくも中(なか)くおなまり
ト扇(あふ)ぎされ とまで ヲヤく冷(つめ)たく成(な)りとト 暖(あたゝ)めてあり一湯(ゆ)を ふねぐひおまあして
つけてやれとお客(きやく)ハぶろく 客「ハイありがたう御座(ござ)居(お)てア
まゐるかどうられしく
お遠(ゑん)入(にう)ら縁(ゑん)なき 房「そんなら誠(ほん)よふえらう 客「
ハイ ト うれしさうふ男(をとこ)の顔(かほ)を見(み)てゐらうり 客「兄(あに)さん王 房「王 客「おい(きく)
きんをつまんで来(き)てあげうなどぶやますは猫(ねこ)ー ひとも

しやうけんめいに 房「アンお菊さんとやら其れ女ちよとおまへヨ
りんしきあるべし
ト風呂の釣 宮一ヲヤト あしめつける是けんどんにしめる
へきりる みなもあはせの一ッきんのやきもちく都みくら
嘆てむ菱想空気。風がめて来る声音のこゝ味せん。
唄声しと論菱雨も。本調子と二上りの風深あゝ
らしく合せ。ゆふ由しき京清調。
「たる足のめにもあつかりぬるも宗堂の羽のたに包ふ
梅の香の花にたとへれ云はしやかおでも
ートぼくぶにさびしげる風とびとつさし一ッ笑

ゆうべ梅やがて声まで気まゝにあるまいがサア
鶯宿梅じやよあらうらサアサアおんでもない
又のまへ
房「あの子 君「ハイ 房「鶯宿梅にあやかしお福へ 君「エヽ
按摩りやうをしてさぶさぶしくと寝て居る風呂の中
へこゝをだして 房「サア爰へ遣入ヨト お君の手を取てとらへ互の肌を
湯の中なれども所から涙にむせぶ組んだ其目
八間も一所に寄を利うと 房「大きにお世話よ

梅人「ーー」何故エ 房「耳まで紅めのヨト互ふ
ぬれし瀬と緋ひつたり寄る。此時提燈の火が四く
蔵てチウ引 房「アレ松がまゐりますヨ 房「マ・・
外へ気を遣折から。摘行の江より表通籠ふ
表の蔵に音ドウ〳〵

春色連理梅巻之四畢